



井茶の花



家庭小説選書

あすの花嫁



(乱丁・落丁の場合はお取替え致します)

昭和三十八年 四月二十五日発行

定価四二〇円

著者 壺井 栄

発行者 石渡磨須子

製作者 内田柳次郎

発行所 東方社

東京都文京区高田豊川町六〇番地

振替東京五七七四番
電話大塚(掛)一八七三番
(七〇三六番)

(印刷・邦文堂印刷所)

長篇小説
あすの花嫁

壺井
栄

蝕	昔	一	空	海	昼	緑	藤	唐	花	長 篇 あ す の 花 嫁
め	を	度	の	辺	の	の		草	の	
る	今	で	ど	の	朝	風	陰	模	由	
花	に	よ	こ	道	顔			様	来	

110 100 86 74 61 50 38 26 15 5

あ　　あ　　あ　　あ　　あ　　あ　　あ　　あ　　あ
と　　し　　い　　お　　渦　　こ　　雲　　心　　細
が　　た　　花　　ほ　　ま　　だ　　の　　紅
き　　の　　赤　　ろ　　ま　　だ　　か　　葉　　霧
　　風　　い　　月　　ま　　だ　　か　　げ　　霧

249 229 213 200 185 172 158 148 134 120

装
幀

玉
井
ヒ
ロ
テ
ル

花の由来

一

汐崎百合子はまだ幼いころから、自分の名前を大そう気に入っていた。それというのも、小さいときから百合の花の美しさを知っていたからだ。その百合の花のようにきれいな名前、それを自分もついているという喜びである。百合の花についての百合子の記憶のはじまりは姫百合であった。裏山の笹がやをさがさとかき分けて、姫百合をさがし出す楽しみを、数え年五歳ぐらいでもう味わっていた。ほととぎすが鳴き出すと、百合子はもう吸いよせられるかのように笹がやをかきわけかきわけ、時がたつのを忘れたりする。祖母がそれを案じて、

「百合子オ　百合子やーい」

と、髪ふり乱してのような大声をあげて山をさがしまわることが、一夏のうちには三度や五度はあった。百合子はおもしろがつて、聞えてもわざと知らんふりで、花をかかえて山から出てくる。

「くちなわでも出てきたら、どうするんじや。ひとりて山をこぎまわつたりして、毒へびにくいつかれたりしたら、山ん中で死んでしまわんならんぞ」

祖母はくりかえして叱る。しかし、百合子にとつてはそんなことへつちやらで、翌日は友だちをさそつてまた山へもぐる。青い笹がやは百合子の背よりも高く、その細い無数の茎をすかして、百合子の目は素早く朱の色をみつける。見つけた限りの花をとつてかえるのに、翌日になると新しい花はまた百合子をむかえてくれる。蕾つぼみの目立たなさを知らぬ百合子は、それが不思議でならず、

「きのう、百合子がみんなとつてしもうたのに、またちやんと姫百合が生えとる。どうしてよ？ おかあさん」

彼女の母はそんなとき、いつもにこにこして、

「そりやお前、百合子がせつかくやつてくるのだからと思つて、山の神様がちやんと百合子の花を咲かしてまつてくれるんじやろ」

ああそうかと百合子は感心してしまい、また翌日も花をもとめて山をこぎまわる。

小学校に上るようになってからだつた。村の子供たちは競つて季節の花を学校へもつていった。教室の窓べりの柱には年中瀬戸ものの鯉の花瓶がかかつていて、花がくるたびに女の先生がそれを活けた。活けながら先生は、

「この花、なーんだ」

と聞いた。椿であつたり、水仙であつたり、菊であつたり、貝細工であつたり、コスモスであつたり、そしてそれらの花の名が答えられない時には、先生が教えてくれた。

「これは、矢車草よ」

「これはエニシダよ」

などと。そんな中で姫百合をもつてゆくのは百合子ひとりだつた。先生はひどく喜んで、

「ああきれい。姫百合、百合ちやんとこにあるの？」

「ううん。裏の山にあるん」

「あら、じゃあおとうさんかおかあさんがとつてきてくれたの？」

「ううん、百合ちやんがひとりでもつてきたん。裏の山に、一ぱいある」

百合子は得意になり、まるで、山じゆうが姫百合だらけとでもいうような顔をした。

「じゃあ、こんど体操の時間にとりにいきましようか」

さつそく姫百合狩りが行われたのだったが、山じゆう歩きまわつても、姫百合はみんなの手に一本ずつもゆき渡らなかつた。

「百合ちゃんの、うそつき！」

「一ぱいあるなんて、うそばつかり！」

みんなに非難されて百合子は困つてしまい、

「それでも、山の神様、百合ちゃんがいくといつても姫百合咲かしといてくれたのに。今日は忘れたんかしらん」

みんながわあつと笑い、やがて口々に、

「百合ちゃんの、うそつき」

「百合子の、うそつき」

百合子は泣きそうなのをがまんしながら助けをもとめるように先生の方をみた。しかし、そのたのみの先生さえ笑つていて、たのみにならなかつた。その時間でその日の授業はおしまいだつた。とぶようにして家へ帰ると、百合子は縫いものをしていた母の肩にしがみついて、泣きながらゆさぶつた。

「おかあさんの、うそつきイ……」

百合子が一年生の、もしかしたら二年生かも知れぬ時のことであつた。

二

そのあとではもう印象に残るほどのことは、姫百合についてはなかつた。あの戦争のはげしさが、教室に花をかざるゆとりをさえ、人々の心からうばつてしまつたのだ。それでも姫百合は年々歳々変りなく、百合

子の家の裏山の笹がやの繁みのかげで百合根を養い、ほととぎすの声をきくとともに、だれに遠慮もせず朱色の花を咲かせていた。

百合子の父に赤紙がきた日の夜、酒に酔った父はこたつにあたりながら百合子を膝にのせ、抱かれるにしては大きくなりすぎた百合子に語りかけた。

「百合ちゃん、お前の名前はな、えらい小説家と、おんなじ名前なんだよ。知つとるか？」

「知らん」

「そりやあ知らん筈だよな。でもな、もうおぼえとけ」

ざらざらの頬をすりよせられて、百合子はそれを突きつけ、こたつをとびこえて母のそばに移りながら、

「こそばゆいもん、好かん。おとうさんの頬つべた、砂がついとるような」

頬を袖口でこすると、父は笑いながら、今度はそばにねむっている百合子の弟の海平の顔に、おおいかぶさつてゆき、また頬をすりつけた。眠っている海平は、夢中ながらじやけんに顔をふつてのがれようとした。

「みんな、おとうさんを、いやがるんだな、よし、おぼえとれ、こら、海平！」

ゆさぶつても、それには目を覚さない海平だった。そんな父を、ぬれたような目でみている母に、子供ながらも百合子は得体の知れぬ圧迫を感じた。

百合子が十歳、海平は三つ下だった。これが父についての最後の記憶になっている。終戦後二年もたつてから戦死の公報がきたことで、悲しみさえも、すぎ去つた「時」にすいとられ、きたえられ、純粋さをうばわれたかのように、単純に泣くことができなかった。そのことが百合子はつらかつた。それにしても、母までが、どうして嘆き悲しまないのだろうか、百合子はふつと不信にも似た感情で母をみることもある。ずつと前から細々ながら続けていた金物や雑貨の商いをしてる母は、後家になつて若やいでさえるのである。

家つき娘だつた母には、よその嫁のような、未亡人としての嘆きの深さはなかつたのかもしれないと、これは少し大きくなつてからの百合子の思つたことだつた。しかし、母がじめじめした女でなかつたことが、どれほど百合子たち姉弟に幸いしていたかしれぬ。

三

百合子が、白百合をすきになつたのは、中学生になつたころからだ。白百合の清純さは姫百合の可憐さをも併せて思い出され、美しいものにあやかれとて命名してくれた親たちの気持ち、百合のにおいのただよつたように、娘心に美しくとけこんでくるようだつた。百合子はよく覚えていて、母にむかつて、

「おとうさんは、ほんとに百合子のこと、そう思つてつ付けてくれたの」

ひとり合点にいうと、

「そう思つてつ付けてくれたつて？ なにを」

「ほら、いつたじやない。出征のとき」

「なんだつたかいのう」

「おかあさんの忘れんぼ。ほら、私の名前のことよ。中条百合子つて人と同んなじだつて」

「ああ、そのことかいの。あれはお前、まさかそこまで考えたわけでもなかつたらうと思うがのう。百合子は夏生れだから、そのときおとうさん、どこかで百合の花でも見たんじやろう。それでつけたんじやろう」

「あーらつまんない。私、ほんとかと思つてみんなに自慢しとつたのに」

「そんならそうしといつてもええじやないか。うそじやないんだから。でもな百合子、その中条百合子という人は、結婚して宮本百合子になつたのよ」

「ふーん」

「立派な人らしいよ。だから、ええじゃないか。おとうさんも、そんなつもりだったかもしれないわ」

「はつきり聞いたいてくれたらよかつたのにな。それがほんとなら、百合子は百合子でも百合子がちがつてくる」

「おやおや大そうな。えらいわるかつたのう」

「悪いわ。——でもまあ、おかあさんの名前よりましじやわ」

「おかあさんの名前じやつて、これでなかなかおもしろいじやろ」

「ひとつもおもしろない。フヨなんて」

「フヨじやない、ふようという花の名前じやないか」

「へえ、ほんとう？」

「うそついたつてしようがない。おかあさんの名前のいわれ、百合子、知つとるじやろう？」

「ううん。どういうん？」

「いわなんだかいの。一ぺんも」

「聞かん」

「そうじやつたかい。そんな筈ないと思うがのう——。おかあさんは、おばあさんが大阪からの帰りに、芙蓉丸という船の中で生れたんじや」

「ええつ、ほんとう？」

「船の中で生れるとな、縁起がよいというので船じや大喜びで、その子は船長さんが名前をつけておくれるならわしに、昔からなつとる。そこで船の名をもろうて、芙蓉。ところがうちのおじいさんは男の子でなかつたというて、腹立てて、役場の届けも書かずに、ただフヨウと口で届けたもんで、フヨになつてしもうた」

「あーら、つまんない。せつかくきれいな名前なのに、おじいさん、馬鹿じやのう」

「女の子なんぞ、不用じやと、悪いやれをいうたりしたそうじやけど、そんなこというから、罰があたつて、おかあさんのあと一人も生れなんだじやないの」

「そんなの封建的、いうんでしよう」

「そうじや、そうじや」

「おじいさん、今生きとつたら、百合子、ぎゆうぎゆうにとつちめてやるんじやけど、しようがない」

「しようがないのう、そればかりは。それに、おじいさんをとつちめても、一たん届けた戸籍は直らんのう。でも、おじいさんもあれで、親としたら、悪い親じやなかつたよ。おかあさん、ひとり娘じやろ。あれがほしい。ほい。これがほしい。ほい。女学校へいきたい。ほい。何でもいうことを聞いてくれたよ。でも、たつた一つ、かんじんなとこで、ぜつたいおかあさんの願いを聞いてくれなんだ。おしまいは勘当するなんぞい出して」

「どうして？」

「あつちこつちからお嬢さんをさがしてきては、うんといえというてせめたてる」

「おとうさんのこと？」

「うん、ほかにもいろんな人がいたのう。おかあさんらの時代には、ことにおかあさんのような一人娘は、それが一ばんつらかつたぞな」

「おかあさんはそんなら、おとうさんのこと、きらいじやつたの」

「というわけでもないがのう。何しろ、おとうさんはええ人じやつたもん。おかあさんのようなわがまま娘でも、うまく舵をとつてくれたようなもんじや」

その時の母の言葉に、多少とも言外の意味が含まれていようなどは、ちりほども考えられぬ年齢であつ

た百合子は、

「百合子、おとうさん大すき」

声を大きくしていつたものだ。

四

高校に入ってから、百合子のあだ名は「百合姫」とつけられた。百合子が、なんぞという百合百合とさわくからだ。花の中で一ばんすきなのは白百合だといひ、ハンカチーフのインシヤルも百合の花を刺しゆうでするし、ブローチだの、がま口代りの財布だの、すべて百合の模様一点ばりだけあつて、百合の花の画はすごく上手だつた。たまに浴衣ゆいなど買つてもらうときの注文は、

「百合の花の柄なら、どんなのでもええわ」

という。級友の菊子が、

「同じように花の名前でも、私なんかあんまり有りふれていて、古めかしく聞えて、いやだけど、百合子なんていうのは上品でええな」

とうらやましがると、それにまた輪をかけてというのが花枝であつた。

「菊ちゃんなんかまだいいわよ。私みなさい。ばくせんと『花』よ。なんの花よつて私おこつたのよ。うちの親たちつたら、ひと馬鹿にしてるでしょう。百合なり菊なり、はつきりしてくれりやいいものを。茄子なすだかかぼちやだかわからんじやないの。花子だの花枝なんて名前つける親は、薄情だと思わない？」

とはいひながら、日頃の花枝は自分の名に不平はもつていない様子だつた。花子でなく花枝としたところがよいというのだ。蝶よ花よと愛されている証拠だと自慢したこともある。花とは桜なり、桜は花の女王なり、と胸をたたいたりもする。とにかく花の名をもつ三人は、その名のゆえに仲よしになつていた。百合子

に百合姫の名をつけたのも、花枝だった。菊子は菊姫であり、花枝が女王なのだ。しかも、三人がクラスではもつとも活発というのか、とにかく無邪気で、何事にも積極的だった。揃ってバレー・ボールの選手なのもおもしろい。日にやけて揃ってまつくろな姫たちであった。校庭の土手の柳の木の下で、三人は時々三人だけの会議をひらき、人が聞いたら馬鹿げたような軽口をたたきあう。

「私もしも自分の子供に花の名前をつけるとしたら、スマレつてつける」
土手のスマレをみつけて花枝が思いつきをいうと、菊子もまげずに、

「そんなら私はタンポポ」

「いつそのことタンポポがいいよ」

「タンポ子ちやんてよぶの。時間が少々むだよ」

「そしたら、オタンとか、ポ子でいい」

「それじゃ少し足りない子みたい。ここがよ」

こめかみのところを指先でたたきながら口から出まかせをいつても、けつこうおもしろかった。そんなあとで、百合子は、とつときの話をしたのである。

「うちのおかあさんの名前、おもしろいのよ、知ってる？ そのいわれ」

「フヨさんでしょ」

「汐崎フヨ子。それがどうしたの」

平々凡々以下じやないか。その以下のおもしろさならわかる、とでもいたげな花枝と菊子の顔をみくらべながら、百合子は、えへんとせき払いまして、

「聞くも涙ぐましき物語りよ。ね、あれ、ほんとに芙蓉つていうのよ。ハイカラでしよう」
「わあ、こじつけがお上手」

「そんなこと。ほんとよ。芙蓉丸つていう船の中で生れて、その船の名前を、船長さんがつけてくれたんだつて」

百合子が母に聞いた通りの話を、美しくかざつて話すと、花枝がまつさきに嘆声をあげた。

「わあ、ロマンチックね。うらやまし」

すると百合子は、

「でも、芙蓉の父親はひどく封建的だつたらしいの。男の子でなかつたというので腹立てて出生届も人まかせで、フヨつて口でいつたんだつて。だから戸籍はフヨになつてしまつたじやない。それをまた、おかあさんたら、だまつてんだから」

母のうけうりをする、と、

「そんなこと、生れたての赤んぼが、なにもいえないじやないの」

と今度は菊子がいう。

「だから暴君なのよ。かわいそうだわフヨなんて、まるで不用みたいでしょ」

「おまけに後家さんなんかにされて、かわいそうね、百合姫の母君」

「そうなのよ」

と三人はしほししよんぼりとなる。卒業を目の前にした三月のはじめであつた。百合子は神戸へ、菊子は東京へと、それぞれの学校もきまり、花枝ひとりが家庭にとどまることで、花の女王さまはこのところしよんぼりさも複雑だつた。彼はうらやましそうに、こんなときにさえ、何度もいつたことをまたくりかえす。

「あーあ。私ひとり、運命のとりこになる。——」